

三国の遊女・哥川の周辺

渡辺, 憲司
立教大学文学部

<https://doi.org/10.15017/4755934>

出版情報 : 雅俗. 1, pp.21-26, 1994-02-28. 雅俗の会
バージョン :
権利関係 :

三国の遊女・哥川の周辺

《特集 雅俗の諸相》

渡辺 憲 司

夏の終わり、遊女の墓を訪ね北陸を回った。その時、越前三国、妙海寺の境内で哥川の句碑を見た。

奥底の知れぬ寒さや海の音

哥川の名は、『俳諧大辞典』にはないが、『続近世畸人伝』などにも紹介されている。郷土資料館、「みくに龍翔館」には、達筆で知られた彼女の書簡が展示されている。彼女は能書家であり、茶道にも秀でた教養人であった。

哥川は、三国の滝谷、出村の荒町屋七郎右衛門の抱え遊女で、源氏名を泊瀬川、実名をぎんといった。享年は二説あって、六十一歳とも、七十七歳ともいう。過去帳が永正寺にある。

釋尼妙春

安永五年七月二十六日

とよだ

やぎん 哥川事

この過去帳には、豊田屋吟の名が他に二人あがっている。二代目の泊瀬川（天明元年十月十日没）と三代目の泊瀬川（文化九年十月五日没）である。永正寺の他に、妙海寺と月窓寺に墓碑がある。墓銘はいずれも同じである。その謂れの詳細は省くが、抱え主の荒町屋、ゆかりの寺である。

豊田屋は、哥川が荒町屋を退廓して、後に自力で遊女屋を営業してからの屋号であるという。遊女が退廓して後に自力で遊女屋を営業し、その女主人になるというのは、遊里として一般的な状況ではない。沖繩、那覇の辻や浜松の二葉遊廓など男性が直接営業に携わる事のないところもあるが、三国はそのような所ではない。

哥川の遊女としての成功を示しているのである。また、泊瀬川という名前が、哥川を初代として三代続くのも、このことをさらにはっきりと示すものである。

三国は、各務支考が宝永元年（一七〇四）に来杖して以来、美濃派の結社日和山吟社が結成された所である。哥川は、三国獅子門七代目甫隆や地元の俳人のみならず、幅広い交遊関係を持った事でも知られている。越前丸岡に隠棲中の梨一、加賀ゆかりの蘭更、金沢生まれの希因、といった著名俳人を初め、加賀の千代女等と交遊があった。田女は「俳諧海山」（寛政元年刊）において、千代女にふれたあと、哥川をとりあげ、

また三国の哥川は、かわたけの身にあれば、うき世の人の煩惱をやすめながら、白象となる舟待顔に、其の風流にあそぶとかや
と記し、二人を並称している。

照れ光れ加賀越前の月ふた夜

哥川に対する俳人としての評価はかなり高い。これは彼女自身の資質にもよるのであるが、彼女を輩出した三国遊廓の特質もその背景にある。

三国の遊廓は、延宝六年（一六七八）刊、「色道大鏡」にあげられている全国二十五か所の公許の遊里に登場している。貞享四年（二六八七）刊、西鶴の「懷硯・巻二・後家に成りぞこなひ」にも三国の遊里に通う話がある。貞享五年刊の「諸国遊里案内」や「諸国遊里好色由来揃」（刊年不明）にも登場する。近松門左衛門作の元禄十二年（一六九九）上演、「けいせい仏の原」や、江島其積の享保十七年（一七三二）刊、「けいせい歌三味線」の主人公も三国の遊廓の人物である。地方遊里の中でもっとも多くの文芸作品に取り上げられた地であり、そのことはそのまま三国の繁栄を示している。

時代はくだるが、天保年間の「諸国遊女見立角力并ニ値段附」や「諸国遊所競」などの番付類でも、前頭二枚目という位置にある。これは地方遊里では新潟につぐ高い評価である。

しかし、遊女の人数で比較すると、三国の遊里はさほど大きいというわけではない。享保十年（一七二五）の「御巡見控」では傾城屋六十二人とあり、寛政元年（一七八九）の「御巡見控」では、約百人と増えているが、

元治元年（一八六四）の「三国鑑」では遊女二十六人・売女三十七人とある。人数は時代により異なるから一概に比較できるものではないが、軽井沢では天保年間に二百三十六人、茨城の祝町で、やはり天保年間に約百五十人、広島御手洗や平戸の田助でも、明和年間に百人以上の遊女がいた。全体の人口も明和年間で酒田や敦賀の約半数の五千三百人程度である。三国の遊里への評価はその規模によるものではない。

また、地方遊里の評価基準として、その伝統の古さが云々されることもある。例えば堺の乳守、下関の稻荷町、奈良の木辻町、室津の小野町などは、中世からの遊女町としての評価を受けている所である。三国港は奈良時代以来の古い港であるが、三国への評価は近世になって、寛文年間以降に北前船の寄港地となつてからのことである。

三国の遊廓は、はじめ松ヶ下を中心とした所にあつたが、港が中心を西へ移すと、上新町の周辺にも出来、さらに出村に多く集まっている。有名な三国小女郎は古い三国節では「三国小女郎は松ヶ下」と歌われ、「けいせ

い歌三味線」では出村の太夫となっている。松ヶ下から出村まで带状に遊廓は続いていたのである。

「明治初年・三国町の住民と職業」（『三国町の民家と町並——三国町民家調査・町並調査報告書——』一九八三・三国教育委員会）の付図3によると、遊女屋は四十四件で、氷川神社の回りに八件ほど固まってはいるが、あとは町に散在している。つまり遊女町は廓といった、特別な地域ではない。風俗の乱れを理由に、遊女町の形成に反対する町も多くあるが、ここではそのような例を見出すことは出来ないし、状況でもなかった。遊女達は町と共にあり住民と同化していた。

福井藩もまた遊女町の形成に積極的で、安永・天明の大火後には、罹災した遊女屋に米穀金銭の貸与をするなどしている。寛政九年（一七九七）には、金津奉行から町の支配人に対して、遊廓繁栄の助成金の申し出があつた。しかし、この時、町は藩からの申し出を断わっていた。三国の町は、海運業務の一切を福井藩から特権的に認められていたが、一方で「町内治定改方記録」（『福井県史』）に見られるように、防災、祭りの自治はもちろ

ん、町内における身分格差を排除して席次は長幼の序により、町議の決定にも多数決を採用している。一般的な封建制度の概念と相矛盾する傾向をこの町は有していたのである。自立的町人意識によって遊女たちは支えられていたと言えよう。

「三国町誌稿」（昭和十三年・三国教育会・謄写版）によると、婚礼の儀式に先立って新婦（にいびと）を迎える家の前には、二人の少女を立たせて水と米を持たせ、媒酌人とにいびとはこれを飲んで中に入るならわしがあつた。そしてこの二人の少女は、お待ち女郎と呼ばれている。いわゆる禿の役割であつたのである。また、同誌には町並みについて、「遊廓が装飾すると、之れをまねて装飾するといったようにする」と、遊廓の影響がこの町に多くあつたことを述べている。

三国の繁栄は、北前船とともにあつた。北前船は一航海千両の儲けがあつたといわれているが、船頭たちの遊びは桁外れに派手であり、遊女を総揚げにする事もしばしばであつたという。また一晚に多くの客を相手にする回しといった事もこの土地ではなかつたかという。寄港

中の相方は一人と決めるのが常で、遊女は女房きどりで身の回りの世話をしたという（「古老に聞く・新保の昔と千石船」昭和五十二年・三国図書館蔵・写本）。

「諸国遊里好色由来揃」では、京で大臣と呼ぶのを、三国では、「お大名」というとある。また、町の入り口に当たる東側に地蔵がある。この地蔵は福井の殿様が出村の遊廓に通う際に道中の安全祈願をしたものであるという。福井の藩士達もこの遊廓の上客であつたようだ。藩士達の遊廓通いに対しては厳しい処分が通例である。佐賀、諸富津の遊廓で遊んだ蓮池藩の武士は、知行高二割没収という厳罰にあつている。佐賀藩では藩士のみではなく、領民にも遊廓通いを禁止し、遊女が領内を通行する際、長く休憩することすら禁止している（池田史郎「諸富津の間屋と遊女」・『地方史研究』一八七号・一九八四年二月）。しかし、これは佐賀藩が一般的であり、三国のあり様の方が、むしろ例外的なのである。三国の遊客は街道筋の飯盛女と遊ぶ旅人ではなく、多くは富裕な者達であつた。散財は遊女から町へ流れ、三国を潤したのである。

町は遊女たちに多くの期待を寄せていた。毎年一月、遊女屋と遊女を集めて、金津奉行と町の支配人が九項目にわたる「遊女御条目」を読み聞かせることがあった。

次のものは明治四年（一八七一）に改正のものである（国文学研究資料館史料館蔵）。

一、三国港の遊女は小女郎とも申し、往古より名高き所柄候得ば、幼少より行儀も教へ、仮初にも下卑たる風俗之無き様、親方たる者しつげいたし、猶又芸能も嗜候様心配いたすべき事。

一、抱之遊女年季明け、何方へ居住いたし候事に相成候共、親方たるもの万事心を添へ、厚く世話致遣すべき事。

以下、欠け落ちに対する処分などが続く。先に示した「三国鑑」にある様に、これは売女と呼ばれた女性たち（私娼）とは異なった、遊女（公娼）に対するものである。なお幕末になると、吉原では公式文書の多くは売女という呼称を用いて遊女たちを呼んでいる。三国では遊女と売女と区別している。ここにも三国遊女の自負があるといえよう。

遊女達の犠牲をまず第一に考えるべきであるが、誤解を恐れずに言えば、三国の町の遊女たちへの期待と恩情が、「遊女御条目」に示されているとも言えるであろう。そして、吉原や島原の遊女たちの一部に期待された教養や品格が三国の遊女には期待されていたのである。

三国の遊女に俳諧にしたしむ者が多かったことも、以上の状況を踏まえねばならない。寛政十年（一七九八）の歳旦帳「越旦越三国日和山」には、遊女梅野・長門の名があたり、喜遊以下、四名の女性の句がある。また、弘化四年（一八四七）の歳旦帳「越三国興ヶ岡」にも、妓哥仙の他四名の句がある。哥川の後を継いだ二代目、三代目もまた俳諧に秀でた遊女であった。

島原の角屋などのように遊廓は俳諧文芸サロンの場でもある。地方遊里においても、下関、稲荷町の玉紫や紅葉も俳句を残している。祝町遊廓にも、引手茶屋鍵屋の主人であった渡辺精作が点をつけた、俳画をまじえた遊女達の吟句集、慶応二年成立の「都々一あた競」なる一書がある。また鶴岡の七日町、八間町の芸娼妓の都々逸集などもある。

しかし、三国のようにまとまった形での遊女俳人の存在を示す例は多いものではない。三国の代表的地方遊里の性格として注目に値するものである。哥川が登場する文芸的土壌を、三国は十分に有していたのである。鄙には稀な「雅」の精神の開花といってもよいであろう。

◇ 天明四年（一七八四）頃、三国職人によって作られた遊女の打ち掛けを見た。三国の遊廓福島屋の太夫お殿が着用したものであるという。二匹の竜が跳ねている。金銀の刺繍、牙には象牙、目にはギヤマンである。三国職

人の自負が伝わるようであった。そして、打ち掛けに哥川の像が重なった。

冒頭にあげた一句を哥川が詠じた場所は、遊廓のあった出村であろう。今、その場所と九頭竜川との間は埋め立てられて、海までの距離は少し遠くなったが、哥川の時代、軒先はすぐに海であった。座敷の真下から冬の海の音が聞こえたのである。如何に「雅」に飾られようと、身を躍ぎ、「うき世の人の煩惱」に汚れた「俗」な遊女である。彼女は、奥底の知れぬ海底に「雅俗」織りなす人の世の果てを見ていたのである。

蓬萊尚賢と雅俗

鈴木 淳

賀茂真淵は、書簡などにもさかんに雅事、俗事を口にしたが、その影響であろう、真淵の周辺の人々の書簡を

見ると、ことさら雅俗を言立てることが少くない。その一例として、蓬萊尚賢の場合を取上げてみたい。尚賢は、

〈特集 雅俗の諸相〉